

東かがわ 手袋ギャラリー

ご案内

入館料：大人1,000円（中学生以下は無料）

東かがわ市ホームページ
<https://www.higashikagawa.jp/index.html>



東かがわ手袋ギャラリー
Facebook



東かがわ市 HP



アクセス

住所：香川県東かがわ市引田 2161-2

○ JR の場合

高松駅より特急で40分または普通列車で90分
徳島駅より特急で30分または普通列車で45分
引田駅で下車して徒歩10分

○ 車の場合

高松自動車道引田インターから7分
つばさ交流センター前の駐車場に車を停めてから徒歩5分
※周辺は道幅が狭いので、つばさ交流センターに車を停めたうえでご来場ください。



お問合せ

特別開館について、施設利用や団体予約等の要望について

東かがわ市地域創生課 0879-26-1276
(〒769-2701 東かがわ市湊 1847-1 東かがわ市役所内)

販売している手袋の問い合わせについて

日本手袋工業組合 0879-25-3208
(〒769-2701 東かがわ市湊 1810-1 香川のてぶくろ資料館内)



はじめに

アートと歴史が交差するまち、引田へようこそ

香川県東部の港町 江戸時代の町並みが残る歴史ある地域

かつて城下町として栄えた香川県東かがわ市・引田（ひけた）は、瀬戸内海に面した穏やかな港町です。江戸時代には、「当国東第一の大湊」とも称され、藩政の拠点として賑わい、今もなお白壁の町家や格子戸が連なる歴史的な町並みが色濃く残されています。引田の風景は、ただの観光地ではなく、そこに暮らす人々の息づかいや、長い時間の流れを感じさせてくれる特別な空間です。

この地域は「引田の古い町並み」として知られ、古い建築が数多く残るだけでなく、醤油や和三盆などの伝統産業も今なお受け継がれています。古き良き文化と、人のあたたかさが交差するこの町には、どこか懐かしく、心を解きほぐすような魅力があります。

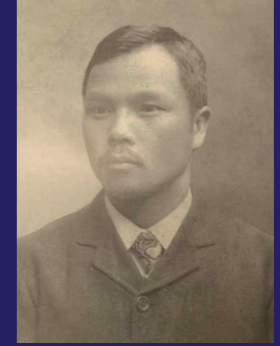
また、引田は自然環境にも恵まれ、瀬戸内のやさしい海風、ゆるやかな山並み、四季折々に彩りを変える田園風景が、訪れる人々を迎えてくれます。小さな町でありながら、その中には歴史、文化、自然、そして暮らしが調和する「豊かな時間」が流れています。



© Shintaro Miyawaki

手袋産業の歴史

1888年、手廻し単環ミシンを使い、指なし手袋「手靴」が作られた。僧侶だった東かがわ市白鳥町松原出身の両児舜礼（ふたごしゅんれい）が、15歳、歳の離れたタケノと大阪に駆け落ちし、生活のために始めたのがメリヤス生地による手袋づくりだった。手袋に人気があると故郷の親類を呼び寄せ、事業を拡大していく。その一人が柵次辰吉（たなつぐたつきち）だった。17歳の辰吉は希望を胸に大阪へ出て、手袋づくりに取り組んだ。しかし半年後、舜礼が急死。残された辰吉と未亡人のタケノは、舜礼の意思を継ぎ、手袋づくりを続けた。



柵次 辰吉（たなつぐたつきち）
（明治7年～昭和33年）
提供：東かがわ市教育委員会、個人所蔵

海と山に近い東かがわは、田畑が少なく、その立地から廻船と漁業が盛んな場所だった。約400年前からは沿岸部で塩田が広がり、多くの人々が製塩業を生業にした。約200年前には砂糖作りが発明され、サトウキビ生産や製糖などの仕事も増えていった。さらに高松藩の初代藩主・松平頼重が造営したことで朱印地としての特権があった白鳥神社の門前町は、大変賑わったようだ。しかし1880年代以降、外国産の塩や砂糖の輸入が盛んになると、製塩・製糖業は廃れていった。



「大阪手袋株式会社縫製部作業風景（大正時代）」
提供：東かがわ市教育委員会、個人所蔵

そんな中、郷里に戻ってきたのが辰吉だった。当時の村長が資金を負担し、教蓮寺境内にミシンを置いて、地域の人々を雇用した。住職が工場長になり、タケノが縫製の技術指導を、辰吉が原材料の供給と製品の販売を担当し、手袋の製造を始めた。これが、現在、手袋国内シェア90%を誇る東かがわの手袋づくりの始まりである。


- 1867年 日本国内で洋式紡績業が始まる
- 1883年 大阪紡績会社を皮切りに、20もの紡績会社ができた大阪は「東洋のマンチェスター」と呼ばれる
- 1888年 東かがわから駆け落ちした両児舜礼とタケノが、大阪でメリヤス製品・手靴づくりを始める
- 1891年 白鳥地区の教蓮寺で奉公をしていた柵次辰吉が大阪へ出て、舜礼の仕事を手伝う。半年後、舜礼が急逝する
- 1895年 辰吉が独立して大阪に「柵次メリヤス製造所」を設立する
- 1897年 辰吉がドイツ製の飾縫手袋にヒントを得て、軽便飾縫ミシンを開発する
- 1899年 製塩業従事者救済のため、辰吉らが教蓮寺境内に手袋製造所「積善商會」を設立、香川県で手袋づくりを始める
- 1902年 「軽便飾縫機」で特許を取得、辰吉はのちに24種類の特許権を取得する
- 1906年 辰吉が単身でアメリカ・ニューヨークへ洋行する、以降2度欧米へ
- 1914年 第一次世界大戦によってドイツと対立したイギリスから大量発注を受ける、白鳥地区に社員1000人規模の大工場が2つできる（大阪手袋株式会社、東洋手袋株式会社）
- 1915年 神崎長五郎がアメリカ製ミシンを参考にして、手廻しから足踏み駆動に改良する
- 1918年 大戦終了で発注が途絶え多くの工場が閉鎖・解散するが、工場に勤めていた多くの人が手袋製造技術を習得する

手袋産業の年表

- 1931年 成瀬歌吉が上海向けに手袋を製造開始する、月2万ダース以上を輸出する
- 1951年 縫い手袋と革手袋の生産が急増する
- 1959年 手袋輸出額が22億円となり、この年の香川県の輸出額の半数を占める
- 1960年 ゴルフ用手袋の製造販売が始まる
- 1973年 スキー用手袋の製造販売が始まる
- 1981年 東京原宿で世界初のファッションショー「81-82手袋コレクション」を開催する
- 1982年 11月23日を「手袋の日」と定める
- 1988年 「ハンドピア'88手袋百年祭」開催、アメリカ・西ドイツ・イタリア・スペイン・中国・韓国の手袋製造業代表を招き、手袋サミットを行う
- 1991年 海外での手袋生産比率が50%になる
- 2014年 古い手袋や製造道具721点が国の登録有形民俗文化財に登録される

展示

瀬戸内国際芸術祭 2025 の開催により、引田は新たな出会いと創造が生まれる舞台となりました。舞台のひとつとなった「手袋ギャラリー」は、この地に日本一の手袋産地になるほどの発展をもたらせた産業を伝える場所です。

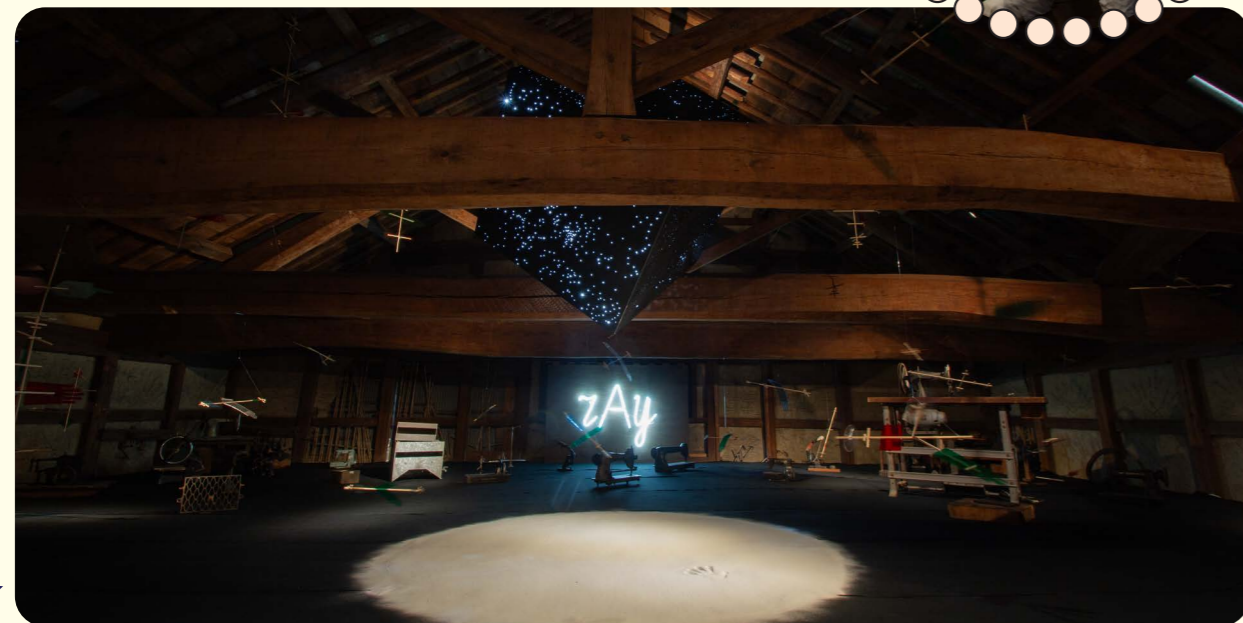
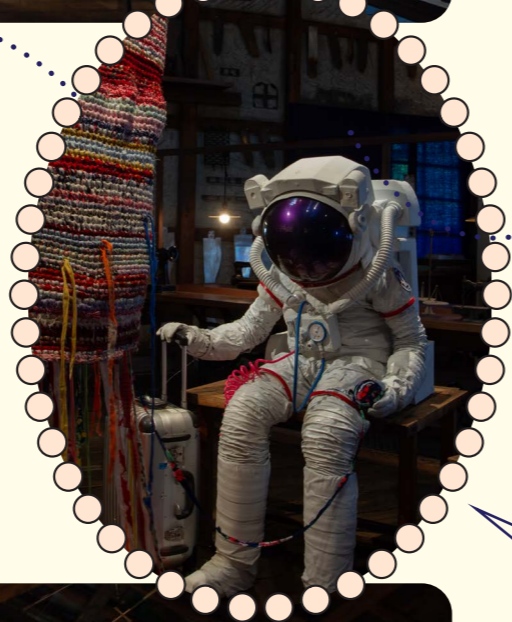
「みんなの手 月まで届く手袋を編もう!」「てぶくろくんのおはなし」



ホール中央にある大きな手袋は、高さ3メートルにも及び、地域の方々が古着の布地で編んだ作品です。人々の生や古着を着ていたときの思い出が表れていることから、古着で作られています。人々の生活や人生の証である手袋は、国境を超え宇宙へ旅立ってこうとしています。手袋の遥かな旅を、宇宙飛行士や三日月、バケツの中の月、スーツケースの月が静かに見守っています。

屋根裏の空間は、失われた手袋の楽園で、これまで作られたあらゆる手袋に捧げられています。使われなくなって失われた手袋たちの魂をフライングオブジェが表していて、中央に吊り下げられている宇宙の立方体と、壁面のロシア語で天国を表す3文字のアルファベットの「rAy」が空間を照らしています。

なお、屋根裏に登って作品鑑賞する際には、梁が低いところにありますので、頭上によく注意のうえご鑑賞ください。



アーティスト

レオニート・チシコフ



1953年、ニージニー・セルギ(旧ソ連)出身、モスクワ(ロシア)在住。現代ロシア美術を代表するアーティスト。2003年以降、月のオブジェと共にルーマニア、ウクライナ、フランス、北極、アメリカなど世界数10カ国を旅して、月のオブジェをその土地の風景の中で撮影し、同じ月の光のもとに世界を結びつける《僕の月の旅》プロジェクトを展開している。

マリーナ・モスクヴィナ



1954年、モスクワ出身。モスクワ大学ジャーナリスト学部卒業。代表作『ぼくの犬はジャズが好き』(小学館)や絵本『ワニになにながおこったか』(偕成社)などの数々の作品によって、児童文学作家として人気を博した。世界中を旅する冒険家でもある。北極、ネパールなどの旅行記や、日本の旅の印象をユーモアをまじえて描いた『枕草子』などの旅行記でも知られる。

館内マップ

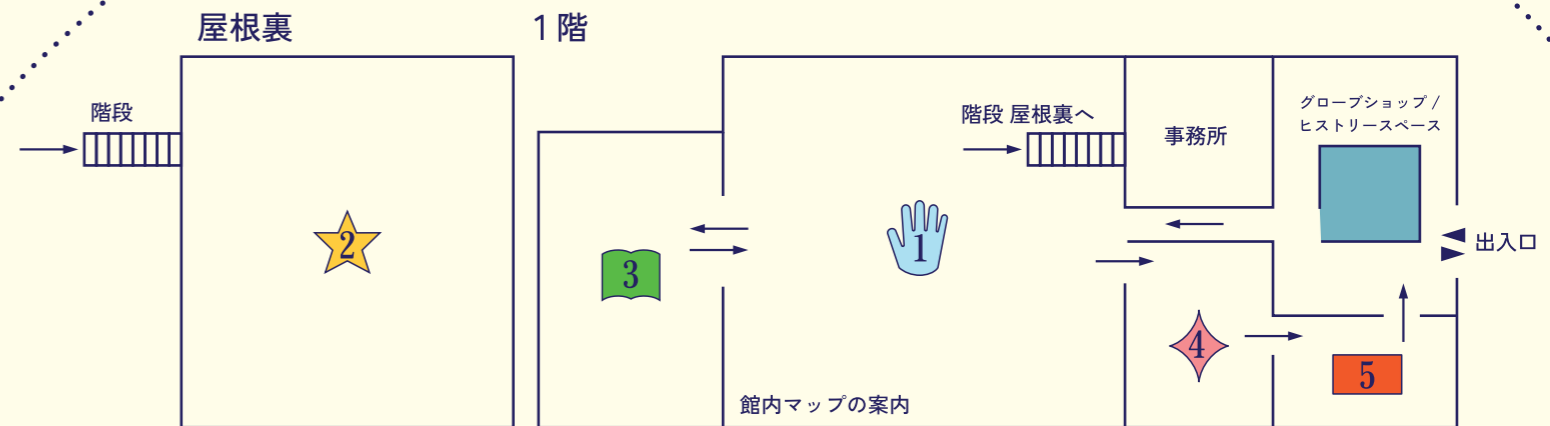


Photo: Shintaro Miyawaki

「HIKETA ワッペン」販売開始しました!手袋ギャラリーの宇宙飛行士が身に付けているワッペンを販売開始しております。ここでしか手に入らない、「HIKETA ワッペン」。ぜひ、手袋ギャラリー来訪の思い出に、お買い求めください。2,500円(税込)

Check!



国内生産90%のシェアを誇り、日本一の「手袋のまち」である東かがわ市。多くの手袋製造会社の所在地を地図上に縫製の糸巻きで表現しました。



1888年、最初に作られた「手靴」から、時代のニーズに合わせて用途開発が進み、ミシン等の道具の進化や、素材の進化とともに、現在の多種多様な手袋づくりへの変遷をまとめた系譜図です。

3 絵本ライブラリー「てぶくろくんのおはなし」

奥の部屋の絵本ライブラリーには「てぶくろくんのおはなし」という絵本とイラストを置いています。この絵本の話は、東かがわにおける手袋産業の育ての親である棚次辰吉が作った手袋が、パートナーを探して世界や宇宙を旅する全14章の物語です。主人公のてぶくろくんは、お寺で暮らしたり、アメリカへ行ったりしていますが、棚次辰吉がお寺で奉公していたこと、手袋製造を学びにアメリカへ船で旅したことが基になっています。座って読むこともでき、絵本のストーリーをじっくり楽しむことができます。また物語に登場する宇宙飛行士や失われた手袋の天国は、手前の部屋の「みんなの手 月まで届く手袋を編もう」と同じ世界観となっています。なお、絵本は手袋ギャラリー内でお買い上げいただくこともできます。



制作の記録

現場の大掃除から始まり、地域の方から古着の募集、10回に及ぶ大きな手袋を作るワークショップと、途方もない作業量がありましたが、施工チームを含め延べ350名以上のボランティアの方々にご参加いただき、皆さんの熱量で、無事に制作を終えることができました。



Glove Shop

手袋ギャラリーでは手袋の販売もしています。グローブショップのガラストップのカウンターには、香川の手袋職人が丁寧に作り上げた日本製に拘った、様々な種類の手袋を展示販売しております。香川県の伝統工芸品の保田織を使用した高級な革手袋をはじめ、UV カット素材の手袋、ニット製の手袋、アウトドア作業用や、ゴルフ等各種スポーツ用の手袋を取り揃えております。また、うどん県だけにうどんに見立てた手袋も販売しております。

ご来場の際には是非、すてきな手袋を手にとってみてください。

更にカウンターの周りには、手袋産業の起源から使われていたミンヤ、古い貴重な手袋も展示しておりますので、是非注目してみてください。



© Shintaro Miyawaki

© Shintaro Miyawaki

オーダーメイド手袋作れます

手袋ギャラリーでは、世界で一つのオーダー手袋をご用意しています。例えば、あなたの手にぴったりサイズの羊革手袋をお好きな色で作ります。また、色や柄を自由にカスタマイズできるニット手袋、お子様が自分で描いた絵を手袋にシールプリントできる手袋等もございます。知人や友人へのプレゼントとしてもご利用いただける商品もあります。

ご来場の記念に唯一無二のオーダー手袋を是非作ってみてはいかがでしょうか。



Photo: Shintaro Miyawaki

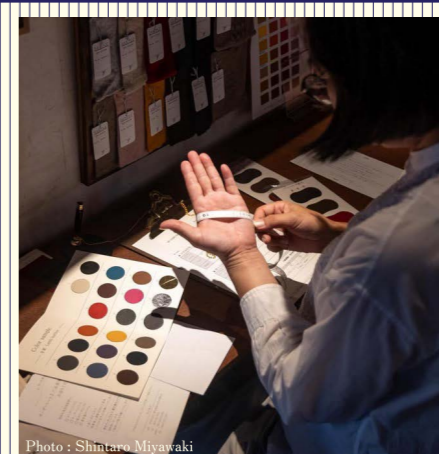


Photo: Shintaro Miyawaki

オーダーの流れ

- 1 手袋の種類を選びます。
羊革、カシミヤ、ニット、etc.
- 2 オーダー手袋受付票と専用オーダーシートに記入
- 3 ショップ店員にオーダーシートを提出
- 4 メーカーでリクエストに沿った手袋を制作
- 5 後日、完成した手袋をご自宅にお送りします

あの人に贈りたい、
オーダーメイドギフトも承ります